県営圃場整備事業（伊那市手良地区）

堤林・島崎遺跡緊急発掘調査報告書

伊那市教育委員会
南信土地改良事務所

序

城館跡を含めた遺跡は各々の地域での政治・経済・文化・軍事等々の各種の方面からみて、重要な担い手であり、かつ、各々の地域での各々の地域史をひもとくのに好資料であることを何人も認めるところであります。従って、遺跡なくしては地域の歴史は語れないと言っても過言ではない現状であります。

近年、我が国は急激な経済発展を遂げ、この動勢はこの伊那市へも怒濤の如くに及んできました。それとともに、各地に新しい開発の波が浸透し、貴重な遺跡が破壊され、消滅しようとしている現状です。これらを保存し、後世の人々に残しておくことは現代生きる我々の責務と思います。

この発掘調査は、長野県南信土地改良事務所によって行われる県営圃場整備事業によっている。梅雨時から猛暑にかけて発掘調査に努力、精励された団長友野良一先生、調査員各位、作業員各位、調査の進行に多大な便宜をはかって下さった南信土地改良事務所職員一同、地元土地改良区役員、地権者各位に対し、心より深く感謝を致すとともに厚く御礼申しあげます。

最後に、発掘調査によって穫られた成果並びに知見については、この報告書の一読を願いつつ、今後、大いに活用されることを望み序と致します。

昭和六十一年三月

伊那市教育委員会教育長　伊沢　一雄

凡例

一、今回の発掘調査は県営圃場整備事業に伴なう、土地改良事業で、第一次緊急発掘調査にもとづく報告書とする。

二、この調査は県営圃場整備事業に伴なう緊急発掘で、事業は長野県南信土地改良事務所の委託により、伊那市教育委員会が発掘調査団を結成して実施した。

三、本調査は、昭和六十年度中に業務を終了する義務があるため報告書は図版を主体とし、文章記述もできるだけ簡略にし、資料の再検討は後日の機会にゆずることにした。

四、本文執筆者は、次のとおりである。担当した項目の末尾に氏名を記した。飯塚政美

◎図版作成者
　◎遺構および地形　友野良一　飯塚政美
　◎土器及び石器実測図　飯塚政美
◎写真撮影
　◎発掘及び遺構・遺物　友野良一　飯塚政美

五、本報告書の編集は主として、伊那市教育委員会があたった。

六、遺物及び図面類は伊那市考古資料館に保管してある。

一　発掘調査の経緯

手良地区の土地改良事業は昭和五十二年度に中坪地区で最初に着手致しました。この事業に伴なって砂場遺跡の発掘調査を実施致しました。昭和五十四年度には中坪区上村部落の水田一帯が土地改良事業区内に含まれるとのことで、事業実施前に施工地区内に存在する上村遺跡の緊急発掘調査を行いました。昭和六十年度事業地区内は手良八ツ手地区であり、この中には堤林・島崎両遺跡が含まれており、夏場に発掘調査を実施いたしました。

昭和六十年六月七日　南信土地改良事務所長と伊那市長との間で『埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約書』を締結し、契約後、ただちに発掘準備にとりかかった。発掘調査に着手する前に伊那市教育委員会を中心にして堤林・島崎遺跡発掘調査会を結成し、この中に調査団を含めて業務を遂行することとした。

二、調査の組織

堤林・島崎遺跡発掘調査会

調査委員会

委　員　長　伊沢　一雄　伊那市教育委員会教育長
副委員長　北村　誠　伊那市文化財審議委員会委員長
委　員　山口　豊　伊那市教育委員会委員長
調査事務局　村山　幸義　伊那市教育委員会教育次長
〃　蟹沢　典人　〃　社会教育課長
〃　柘植　晃　〃　〃　課長補佐
〃　宮原　強　〃　〃　係長
調査事務局　飯塚　政美　伊那市教育委員会社会教育課主任
〃　高木いづみ　〃　主事

発掘調査団

団　長　友野　良一　日本考古学協会会員
副団長　根津　清志　長野県考古学会会員
〃　御子柴泰正　〃
調査員　福沢　幸一　〃
〃　飯塚　政美　日本考古学協会会員
〃　小池　孝　〃

〔作業員名簿〕　酒井岩夫　池上大二　三沢寛　大野田英　大野田三千代　埋橋程三　後藤重美　酒井とし子　柴佐一郎　登内政光　小松善恵　伊藤勝　登内昇　網野実子（敬称略順不同）

三　位　置

堤林遺跡、島崎遺跡は、長野県伊那市手良八ツ手竹の内部落に所在する。遺跡地までの道順は次の通りである。国鉄伊那北駅で下車し、東側三〇〇m程行くと天竜川が南北に流れている。この川にかかっている二条橋を渡って、直進二〇〇m程東へ行くと、三叉路の交差点があり、このところを左折して、進路を北にとって直進していくと、手前より上牧、野底、福島の集落が道路をはさんで西、東に点在している。福島の集落の北はずれに東から西へ瀬沢川が流れており、この川をはさんで南側は伊那市福島、北側は箕輪町福与となっており、いわば行政体の境界線になっている。箕輪町卯ノ木集落の南端の信号機のある交差点を右折して、約一km程行くと、八ツ

手部落がある。堤林遺跡は真宗寺の南側に、島崎遺跡は八ツ手公民館の西側にそれぞれ展開している。

四　地形・地質

堤林遺跡、島崎遺跡の両遺跡はともに八ツ手川に面している。前述した微地形を述べてみると次のようである。堤林遺跡は東から西へ傾斜する山麓扇状地の扇端部に該当し、標高は六三十m～六五十m位を測る。島崎遺跡は北から南へ傾斜する山麓扇状地の扇端部に含まれ、標高は六二十m～六〇〇m位を測定できる。両遺跡とも八ツ手川との比高差は五m位ある。八ツ手川は最終的に瀬沢川と合流し、天竜川に注ぎ込んでいる。いわば天竜川の支流の支流である。

次に両遺跡の地質を考えてみることにする。双方の遺跡は前述したように山麓扇状地の扇端に位置しているために後方からの押し出しによる堆積土が厚く覆っており、おそらく、ローム層に達するには平均的にみて、表土面から二m位下層まで掘らなければならない。

堆積土の成因が押し出しによっているために、大部分の土層に砂質分が多く含まれていた。層位は上から耕土、黒土、黒砂褐色土、茶砂褐色土、黄砂褐色土、ローム層の順になっていた。

五　周辺遺跡の歴史的環境

手良地区は伊那市東部地区に含まれ、天竜川左岸地域にあたっている。この地域は天竜川による河岸段丘と、天竜川の支流である三峰川と棚沢川によって形成された河岸段丘と、扇状地が存在し、その上を厚いローム層が覆っている。

次に遺跡分布の状態を考えてみよう。棚沢川周辺に濃密な遺跡の点で結ぶ分布帯が広がっている。手良の名が文献上に初めて登場するのは平安時代承平五年（九三五）倭名類聚鈔からである。この文献のなかに手良郷の存在が実証されている。中坪区の北端、竜ノ沢川の上流に大百済毛、小百済毛という地名が現存しており、この場所付近に古代の手良公と称する帰化人が居住していたと伝承されている。手良に散在する遺跡数は、約五十ヵ所に近い数値を示し、そのほとんどが棚沢川によって形成された河岸段丘面、扇状地面に存在している。棚沢川は伊那山脈鉢伏山（一四五五m）に源を発し、全長約九kmを流れて、福島区で、天竜川に合流する。

手良における縄文早期遺跡としては浜弓場、所洞、ワランベ、松太郎窪があげられる。縄文中期の遺跡として所洞、辻垣外、地神原、宮の平、東松、鳴神、狐垣外、松太郎窪等々があげられ、縄文晩期には火葬墓とみられる野口遺跡がある。南垣外からは平安時代の灰釉陶器長頸瓶と人骨が出土した。南垣外から福島地籍まで約一・五kmの広い一帯は手良郷の中心地として考えられており、そのなかで最も注目されているのが福島遺跡である。

笠原堂垣外遺跡からは古式土師器の良好なセットと住居址が発見され、また、かつては、矢塚、山伏塚の古墳が存在していたが、現在は消滅している。山伏塚には石棒や石製品を八～九本立てて、雁高大明神として祀られ、かなりの信仰を集めていたと伝えられている。浜弓場遺跡の南側にある貯水用堤造成の時に、多量の人骨が出土したと伝えられている。

今回の発掘調査を実施した堤林・島崎遺跡付近には中世・近世に

第１図　位置及び遺跡分布図

遺跡の名称

①沢　山　⑩矢　塚　⑲東　松　㉗小百済毛　㊱六道原　㊹辻西幅　㊷林　越
②ヨキトギ　⑪野口畑　⑳古八幡　㉘近　洞　㊲野　口　㊺島　崎　㊸菅　窪
③蟹沢桜林　⑫金　山　㉑鍛治垣外　㉙上　村　㊳下手良中　㊻堤　林　㊹富士塚
④ワランベ　⑬竜の沢　㉒中　原　㉚社宮地　原　㊼山の田　㊺古屋敷
⑤入　林　⑭鳴　神　㉓石見堂　㉛宮の平　㊴大　原　㊽神手原　㊻城　山
⑥大　上　⑮山伏塚　㉔二十平　㉜砂　場　㊵松太郎窪　㊾日向畑　㊼浜弓場
⑦狐垣外　⑯丸　山　㉕地神原　㉝清水洞　㊶南垣外　㊿笠原堂垣外
⑧鳥ノ宮　⑰向　田　㉖小萩原　㉞郷の坪　㊷角　城　(51)堤　下
⑨辻垣外　⑱堂垣外　㉗大百済毛　㉟柿の木　㊸垣　外

関連した城跡、神社、堂が存在しているので、それを記してみる。
登内の城、小松の城（北側は八ツ手川が崖下を流れ、この川は屈曲し、西側に流れ、南側は自然の沢。平山式館城単郭雑形、大手は東側、小松某の城主と伝承されている。城内に稲荷社を祀る。碑があり、その銘文は次のようである。「寿永三歳八月朔日　霊山寺伝大居士　国家一翁常夏信士」）
寺院としては真宗寺（有住）、竹之内薬師堂（無住）、宗明寺（無住）がある。神社としては松尾社、神明社がある。（飯塚政美）

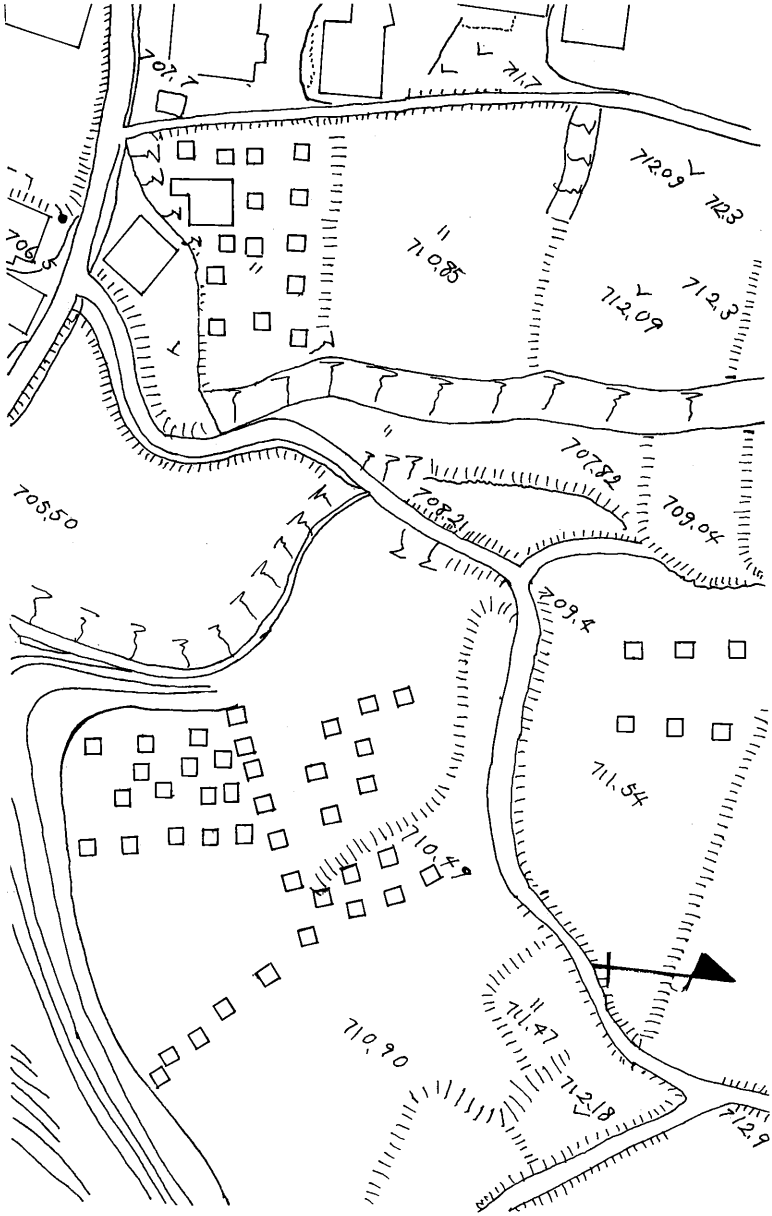
堤林遺跡

一　発掘日誌

昭和六十年七月八日（月）　雨時々曇　雨降りだったので、伊那市考古資料館で発掘器材の整備を一日かけて実施する。
昭和六十年七月九日（火）　晴　昨日まで降り続いた雨が、うそのように晴れ、梅雨あけのような天気となった。伊那市考古資料館から発掘現場へ発掘器材を運搬する。午後、島崎遺跡と提林遺跡へテントを建てる。
昭和六十年七月十日（水）　晴時々曇、雨　午前中は小松の城の対岸付近の最南部の荒地・桑畑の草苅りを実施する。午後は畑地の北側の水田で、グリット掘りを実施する。わずかであるが、内耳土器片と鉄釉茶碗片が出土した。水田下約一m位で、砂層が堆積しており、水が湧き出し、遺構の検出はのぞめない。
昭和六十年七月十二日（金）曇時々晴　草苅りを実施した地区のグリット掘りをする。八ツ手川に面した地点で、縄文晩期土器片が数点出土した。約一m五十cm下で、砂層の堆積が多く、水が出てきた。このような状況下であるため、遺構検出の可能性は極めて低いものと思われた。
昭和六十年七月十五日（月）晴　本日は久しぶりの晴天であった。夕方、梅雨あけ宣言が出た。本日は薬師堂の北側へグリット掘りを入れる。耕土が浅く、十cm位であった。中世陶磁器片の出土が若干あったが、遺構の検出は何もなかった。薬師堂の近くのグリットから地場層よりやや下に永楽通宝が一枚出土した。水田下に埋没していたわりには緑青の吹き出しが少なかった。午後はテントを設営した場所より北側の水田及び東側、さらに、前日実施した地区の東側へグリット掘りを実施する。表土下一m位で、砂層の堆積が厚く、遺構の検出はのぞめない。
昭和六十年十二月～昭和六十一年一月　図面の整理、原稿執筆、報告書の編集
昭和六十一年二月　報告書を印刷所へ送る。
昭和六十一年三月　報告書を刊行する。

二　遺　構

今回の調査では遺構の検出は何もなかった。その理由としては後方の山麓の押し出しが強く、定住生活を営むには不適当な場所であったことと推測できると思われる。



第２図　地形及びグリット配置図（１：1,000）

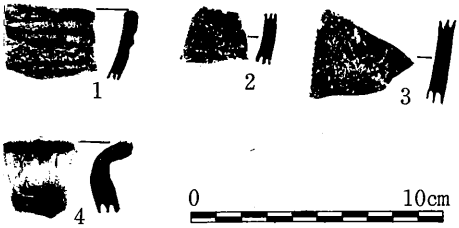
三　遺物（第3～4図、図版4～7）

(1) 土器（第3図、図版5）

（1）は器厚が四㎜～五㎜位の中厚手の土器に属しており、わずかに内反する口縁部の破片である。口縁はわずかに波状口縁を呈し口唇は若干丸味を成している。文様は口縁に沿ってヘラによる沈線が横位に数条走っている。その文様の入り具合は若干工字文風になっている。黒褐色を呈し、少量の雲母を含み、焼成は普通である。縄文晩期後半の大洞A式に属していると思われる。（2）の土器片はほぼ（1）と同様である。

（3）は外面に無数に、さらに不規則に貝殻条痕文を配してある黒褐色を呈し、少量の長石を含み焼成は普通。縄文晩期終末期の貝殻条痕文の一派と思われる。

（4）は極めて外反の強い土師器の甕である。表面にカキ目痕が顕著に認められ、国分期の土師器であろう。



第3図　土器拓影

第4図　古銭拓影
（1：1）

(2) 古銭（第4図、図版4）

竹之内薬師堂の裏、水田の地場層直下より出土した永楽通宝である。地中に埋没していた割には緑青の吹き出しが極めて少ない。おそらく鋳造する時に良質の銅を利用したのであろう。

(3) 陶磁器（図版6～7）

今回の調査で出土した陶磁器は全部で五十片程であった。その内訳は大部分が近世で、数片ではあるが、室町中期、室町後期のものが含まれていた。出土した主なるものを第一表に記した。三片ではあるが須恵器片が含まれていた。

第一表　出土陶磁器一覧

図版	番号	名称	時期	備考
6	1	瀬戸鉄釉摺鉢	江戸中期	
〃	2	瀬戸鉄釉行平	十九世紀	外面に炭化物付着
〃	3	瀬戸鉄釉摺鉢	十九世紀	口縁部
〃	4	瀬戸鉄釉燈明皿	十九世紀	
〃	5	瀬戸灰釉碗	十八世紀後半	底部
〃	6	瀬戸灰釉小杯	十八世紀後半	口縁部
7	7	古瀬戸灰釉四耳壺	十五世紀	
〃	8	瀬戸灰釉燈明皿	十八世紀後半	口縁部
〃	9	瀬戸灰釉碗	十七世紀中葉	底部
〃	10	瀬戸鉄釉よろい茶碗	十八世紀後半	
〃	11	古瀬戸鉄釉稜皿	十六世紀前半	大窯期
〃	12	伊万里染付半筒	十九世紀前半	

四　まとめ

梅雨の晴れ間をぬっての調査であったために、発掘調査の作業進行上、悪い面が重なってしまった。調査を実施した地区は前述したように、下部地層は湿地帯に、上部地層は山麓の押し出しによる砂層より組成されていた。この湿地帯より縄文晩期土器片が出土していることからみて、かつては晩期の湿田が展開していたのであろう。

従って、晩期の居住地はもう少し北へよった微高地付近に存在したと想定されるが、今回、この地域は土地改良事業地区外であったために、発掘調査はできなかった。

竹之内薬師堂のすぐ近くより永楽通宝が出土した。この古銭は中国明帝国第三代永楽帝政の時に鋳造されている。鋳造年代は一四三十年代であり、室町幕府三代将軍足利義満が行った日明貿易（いわゆる勘合符貿易）の時に我が国に輸入されたといわれている。この銭は流通経済が急激な発達をとげた戦国時代頃には一般民衆にもかなり使用されていたものといわれている。

戦国期には六文銭の葬法がある程度定着化しはじめる。今回、永楽通宝が出土した地点が堂に近いところからして、葬法に使用した六文銭の一枚かも知れないが、発掘調査時に土壙が発見されなかったので、この説も結論化するわけにはいかない。

出土陶磁器をみてみると、大部分は江戸時代中期頃で、わずかに室町中期、室町後期のものが混じっている。室町期のものは遺跡地のすぐ南側、八ツ手川をへだてて存在する小松の城と関係するものであろう。

近世の燈明皿の出土は竹之内薬師堂、あるいは松尾社と関係するものであろう。いずれにしても、現在は、これらの社寺崇拝は衰退してしまっているが、江戸中期頃にはかなり盛行したのであろう。

日常雑器である摺鉢、行平、碗、茶碗等々の出土は庶民の日常生活を実証するのに好資料となるであろう。日常雑器の出土した地点は、現在は、家屋が全くなく、ただ水田になっているだけである。陶磁器編年代からして江戸中期頃には庶民の民家が実在したのであろう。民家滅亡後、水田にしたのであろう。

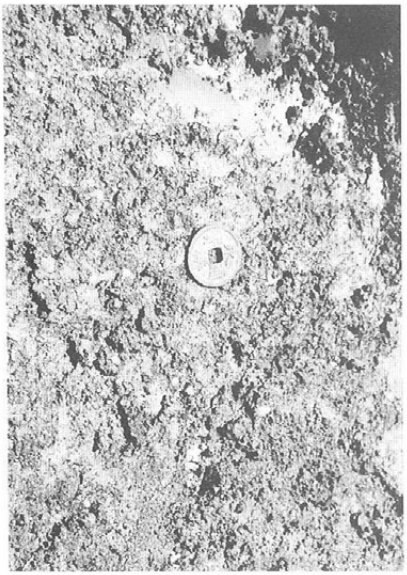
陶磁器鑑定は愛知県陶磁資料館学芸課長柴垣勇夫氏、同館学芸員井上喜久男氏、仲野泰裕氏に依頼した。ここに三氏に対し、厚く御礼申し上げます。

（飯塚政美）

図版１　遺跡地を東側より眺む

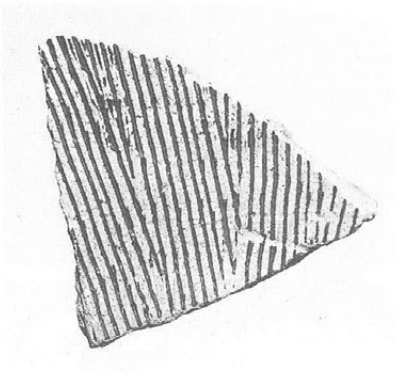
図版２　発掘調査を実施したグリット

図版 3　発掘風景

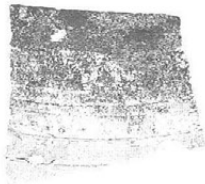


図版 4　古銭出土状況

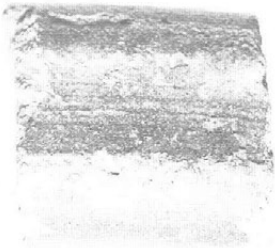
図版 5　土器出土状況



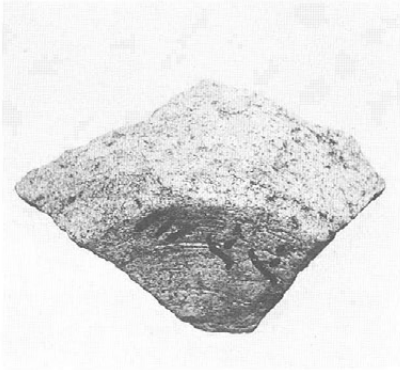
1



2

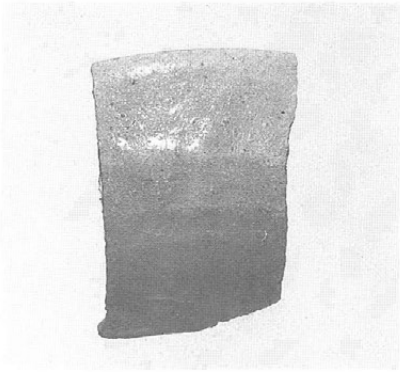


3



4

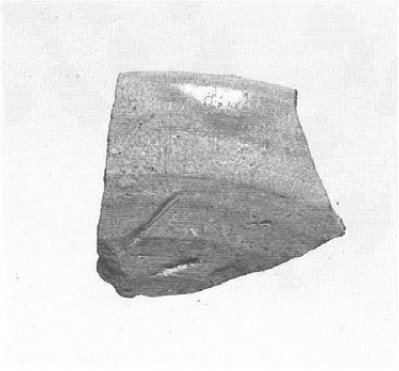
5



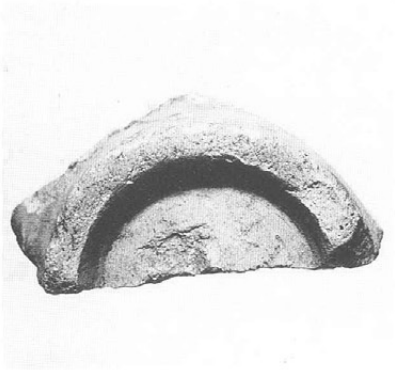
6

図版 6　出土陶磁器

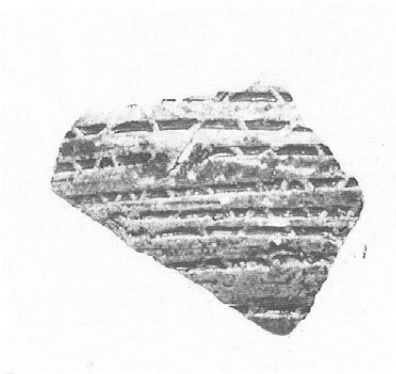
7



8

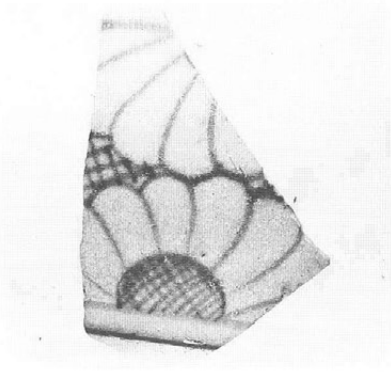


9



10

11



12

図版７　出土陶磁器

島崎遺跡

一　発掘日誌

昭和六十年七月九日（火）　晴　伊那市考古資料館から島崎遺跡へ発掘器材を運搬する。午後、島崎遺跡の現地へテントを建てる。

昭和六十年七月十六日（火）　晴　堤林遺跡よりテント及び発掘器材を運搬し、七月九日に建てたテントの南へ、南北に長くもう一張、テントを建てる。テントの内がいつも整理・整頓がゆきとどくように随所に棚を設ける。

昭和六十年七月十七日（水）　晴　八ツ手川に面した最南端の水田へ、ところどころグリット掘りを実施する。グリット掘りを実施する前にライ麦が茂げっていたので、それを苅り取る。午後は南側から二枚目の水田のグリット掘りを実施する。表土面から一m位下った面より砂層の堆積が厚く覆っていた。二枚目の水田の地場層直下の層より、かなり多量の中世末から近世初頭の陶磁器片の出土があった。その主なものは燈明皿、皿等々であった。

昭和六十年七月十八日（木）　晴　下から三枚目の水田の草刈りを実施し、グリットを設定し、掘りはじめる。全般的に耕土は深く五十cm程もあった。近世の陶器片が出土した。水田のうちで、西側によった方にやや多く遺物が出土した。

昭和六十年七月二十二日（月）　晴　宗明寺の存在したすぐ近くの水田を掘りはじめる。水田の西側一帯に南北に長い帯状の落ち込みがみられた。午後よりこの落ち込み付近を拡張する。落ち込み付近より摺鉢の破片が出土した。

昭和六十年七月二十三日（火）　晴　昨日、検出された帯状の落ち込みを精査するに、どうも自然的につくられた可能性が強くなった。午後は登内勲氏宅のすぐ西側の水田でためし掘りをする。さらにその水田の北側の道に沿った麦畑、テントを建てた水田へ、それぞれグリット掘りを実施してみる。若干の陶器片が出土した。

昭和六十年七月二十四日（水）　晴　登内勲氏宅の西側の水田とその北側の水田へブルトーザーを入れて耕土剝ぎを実施する。耕土を剝いだあと、ただちに、登内勲氏宅の西側へグリットを打ち、一つおきに掘りはじめる。若干、陶器片が出土した。この水田の最も東、北よりの隅に黒い落ち込みがみられ、何かの遺構と思われたので拡張をする。

昭和六十年七月二十五日（木）　晴　前日、検出された遺構の拡張及び掘り下げを進めていく。夕方までに、ほぼ完掘する。底面より、水が吹き出してくることからして、集落の中心的存在である水溜めに利用したのではないだろうか。なかから内耳土器片が出土。西方のグリットを掘り進めていくと独鈷石が出土した。

昭和六十年七月二十六日（金）　晴　水溜め付近の西側一帯のグリット掘りを実施し、柱穴群の発見につとめるが何も検出されなかった。午後は道に面した最も近いところにグリットを設定し、掘り進めていく。遺物は若干出土したが、柱穴群の検出はなかった。

昭和六十年七月二十九日（月）　晴　水溜め遺構の平面及び断面実測を終える。水溜め遺構の清掃及び写真撮影を終える。

昭和六十年七月三十日（火）　晴　道具のあとかたづけをする。テントをこわし、発掘器材の水洗いをする。本日をもって現場の作業を終了する。発掘器材の運搬をする。

昭和六十年十二月～昭和六十一年一月　図面の整理、原稿執筆、報告書の編集

昭和六十一年二月　報告書を印刷所へ送る。

昭和六十一年三月　報告書を刊行する。

二　遺　構（第2図、図版6）

今回の調査で検出されたのは中世水溜め遺構一基だけであった。調査を実施した時点で、縄文土器片、中世陶磁器片、近世陶磁器片等々合わせて、かなりの量が出土した。このことは、かつては、前述した時代の遺構があったと推測されるが、その後、数度にわたって実施された土地造成の時に少しづつ破壊されてしまって、現存しないのであろうと思われる。

今回検出された中世水溜め遺構は中世村落の一端を想定できる極めて貴重な遺構であり、単に一基だけ検出されただけだと言う考えは捨てて、この遺構を通して、中世村落の広がる範囲を考えてみる必要性が高くなるのであろう。

(1)　水溜め遺構（第2図、図版6）

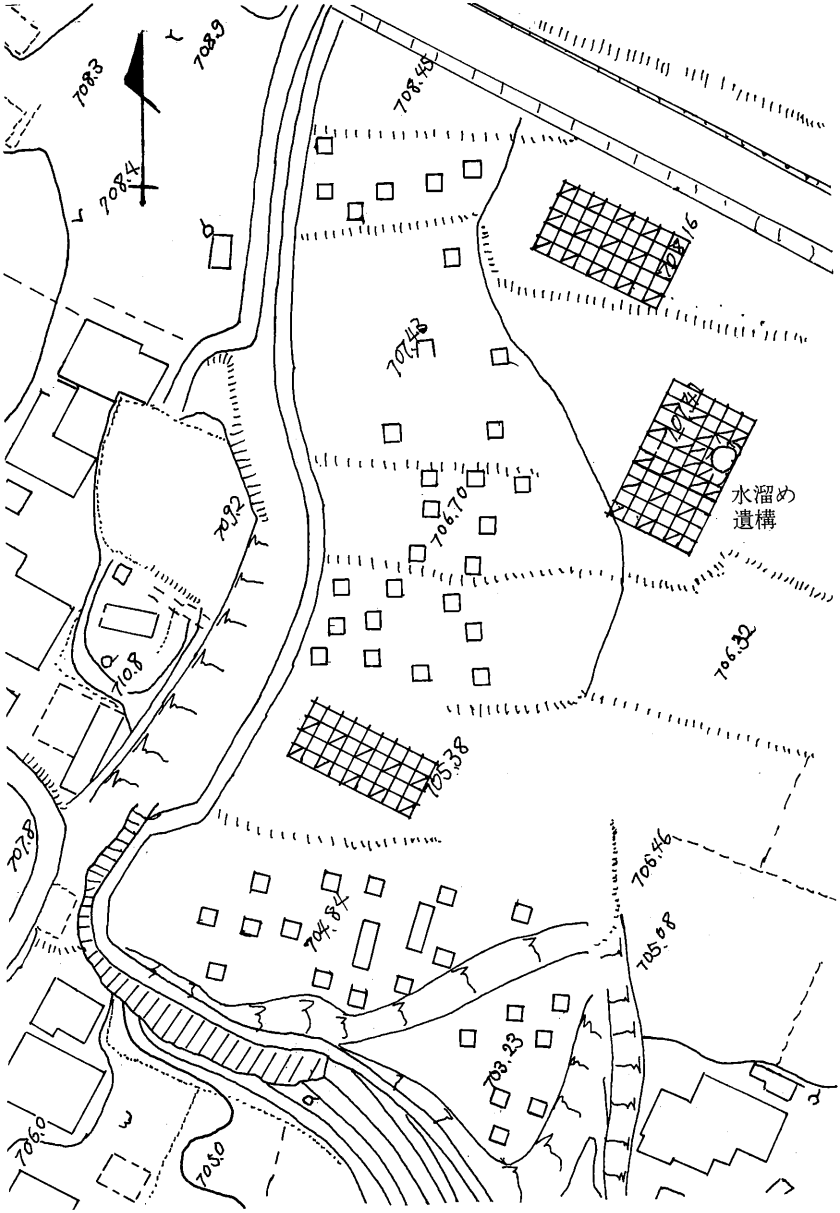
この遺構は今回発掘調査を実施した北東の一角に検出されている。この遺構から東へ十m位行った所には宅地が現存し、水溜め遺構の利用状況がある程度推測できるのであろう。

現況は水田であり、この水田耕作表土面より四十cm位下った砂質状のローム層を掘り込んで、この遺構を構築してある。平面プランは上部ではところどころで角張った地点を認めるが、全体的には円形状を呈す。底面のプランは正円形状に近い様態を呈す。それらの規模は上面で南北二m五cm、東西二m四十八cm位を、底面で一m二十三cm、東西一m三十cm位を測る。北側の一角に南北四十cm、東西一m七十cm位の規模で、隅丸長方形状のテラス状遺構が存在しているこれは水溜め遺構に付属するものであろう。

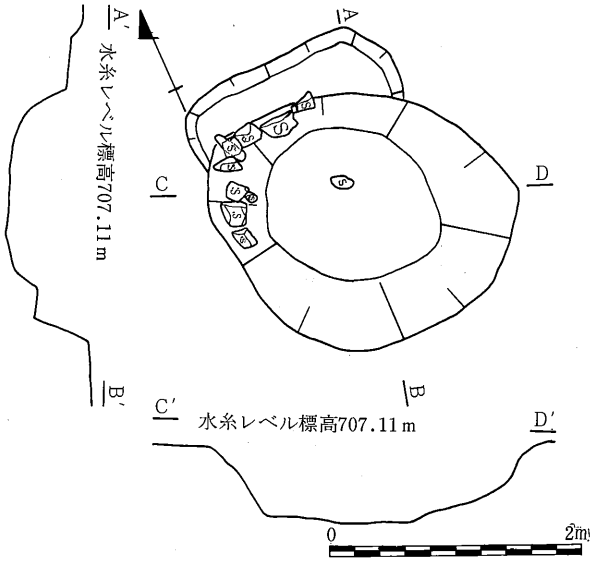
深さは五十cm～五十五cm位を測る。壁断面は四壁とも、やや湾曲状を呈す。壁面の下半分部は砂質の混合度合が高くなっており、しかも砂質自体の粒子もやや大きくなっていた。底面は全般的に砂質層より成り立ち、やや凹凸があり、軟弱状態を呈し、いたるところから水が湧き出している。

西壁から東壁にかけて、上面に大小様々な砂（花崗岩・変成岩）を置いてあった。これは壁上面がくずれないようにしたのであろう。構築当時には礫を全面に敷きつめてあったものと思われる。

底面近くより内耳土器片が出土した。従って、中世の遺構で、水を溜めて、飲料水に利用した可能性が強いと思われる。



第１図　地形及び遺構配置図（１：1,000）



第2図　水溜め遺構実測図

三　遺　物　（第3～5図、図版7～18）

(1)　土　器　（第3図）

今回、発掘調査して出土した縄文中期土器片は数片だけであった。その他、出土した土器は中世内耳土器片があった。内耳土器は細片であったので今回は図面上には掲載しない。

（1）は器厚が十二㎜位あり、極めて厚手の部類に属する。破片の上部は爪形状の刻目を押捺し、中・下部には二本の沈線が横走している。赤褐色を呈し、少量の長石を含み、焼成は良好である。

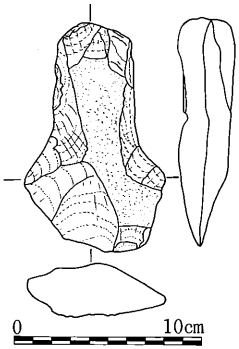
（2）は器面全体にわたって剝落しているので、文様は全く不明である。色調、胎土、焼成は（1）と同様である。（1）は勝坂期に含まれると思われる。

第3図　土器拓影

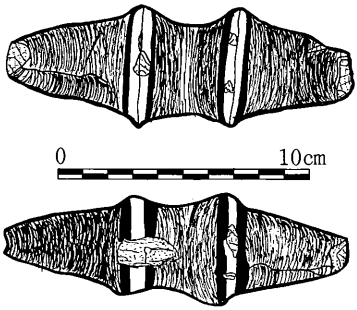
(2)　石　器　（第4～5図、図版12）

第4図は下端がやや開き撥形を呈する打製石斧である。硬砂岩を利用している。刃部は全般的に周縁に及び、剝離は割合に大きい。自然面は中央部から右下端に大きく広がっている。

第5図はグリット内から



第4図　石器実測図



第5図　石器実測図

出土した独狐石である。長円形状の閃緑岩を利用してあり、周縁及び全面にわたって丁寧に磨いてある。両側の突端部は破損している。中央部付近は極端に凹み状を呈している。凸み状の両側に若干突起凹状に高くなったところがあり、これは全周した状態を成している。

(3) 陶磁器 （図版7～11、13～18）

今回の調査で出土した陶磁器片は全部で二〇〇片程あった。そのうち一割弱は中世陶磁器片、残りは近世のものであった。出土した主なるものを第一表に記した。

第一表　出土陶磁器一覧

図版番号	名称	時期	備考
13 1	中津川大平鉢	十三世紀	
〃 2	瀬戸灰釉こね鉢	十八世紀	底部
〃 3	瀬戸鉄釉摺鉢	〃	〃
〃 4	古瀬戸鉄釉摺鉢	十六世紀前半	内面に炭化物付着
〃 5	瀬戸鉄釉摺鉢	十七世紀後半	口縁部
〃 6	古瀬戸灰釉大盤	十五世紀後半	〃
14 7	古瀬戸灰釉皿	十六世紀中葉	大窯Ⅱ期（口縁部）
〃 8	瀬戸灰釉碗	十八世紀後半	口縁部
〃 9	〃	〃	底部
〃 10	〃	〃	〃
〃 11	古瀬戸灰釉丸皿	十六世紀前半	大窯Ⅱ期（口縁部）
〃 12	瀬戸灰釉仏しょう器	十九世紀	底部

図版番号	名称	時期	備考
15 13	瀬戸長石釉鉢	十八世紀～十九世紀	
〃 14	瀬戸灰釉筒形三足香炉	十八世紀前半	底部
〃 15	瀬戸灰釉茶碗	十八世紀～十九世紀	〃
〃 16	瀬戸鉄釉燈明受皿	十九世紀後半	〃
〃 17	瀬戸鉄釉茶碗	〃	〃
〃 18	瀬戸鉄釉行平	十九世紀前半	〃
16 19	古瀬戸鉄釉甕	十六世紀代	大窯期
〃 20	瀬戸鉄釉鍋	十八世紀代	底部
〃 21	瀬戸鉄釉摺鉢	十八世紀	
〃 22	瀬戸御深井釉茶碗	十八世紀後半	染付
〃 23	瀬戸染付茶碗	十九世紀	底部
〃 24	伊万里雪輪文茶碗	〃	〃
17 25	志野長石釉皿	十七世紀前半	中馬街道筋
〃 26	瀬戸灰釉香炉	十九世紀前半	底部
〃 27	志野長石絵瀬戸	十九世紀後半	
〃 28	瀬戸天目ヒョウ燭	十八世紀後半	底部
〃 29	瀬戸鉄釉三足香炉	十七世紀後半～十八世紀前半	
〃 30	瀬戸鉄釉茶碗	十七世紀後半～十八世紀	底部
18 31	瀬戸灰釉燈明受皿	十九世紀	口縁部
〃 32	白磁碗	十五世紀	底部（明国）

図版	番号	名称	時期	備考
〃	36	古瀬戸灰釉内はげ丸皿	十六世紀中葉	底部　大窯Ⅱ期
〃	35	青磁碗	十五世紀	口縁部(明国)
〃	34	伊万里青磁碗	十七世紀前半	底部(国産)生焼
18	33	白磁碗	十三世紀	口縁部(元国)

四　まとめ

島崎遺跡は前述した堤林遺跡と東西に通る県道を境にして南側に広がっている。このようなために、地質の状態は堤林遺跡と同様に水田耕土直下に地場層があり、その下に砂層が厚く覆い、地表下一m位で、湿地帯となり、水が湧き出してくる。そのために、発掘調査を実施した初日の結果からして、古い時期の遺構の存在はないものと思った。遺構の存在があったとすれば、中世・近世の遺構と思われた。おそらく、これらの時期の遺構は砂層面に存在するのであろう。

出土陶磁器の量から察して、中・近世の遺構はかつては相当数存在したと、想定できるが、これらの時期の遺構は浅い面に構築されていたために、水田造成や水田深耕のために大部分破壊されてしまったと思われる。

水溜め遺構内から内耳土器片が出土したので、中世に位置づけられる。本遺構の用途は日常生活の共同用水水汲み場であったと推測され、従って、付近に中世から近世にかけての村落が存在したのであろう。この遺構が村落共同体のどの場所に位置しているかは、単独な検出のために、その実態把握は不可能と思われる。

土器としては勝坂期と内耳土器がみられた。石器としては打製石斧と独鈷石が出土した。打製石斧は勝坂期のもの、独鈷石は堤林遺跡との関連からして縄文晩期にあてはまると思われる。

出土陶磁器類の中に、鎌倉前期から戦国時代にかけての中世陶磁器が含まれており、これらは近くに存在する小松の城、登内の城との関連を裏付け、二つの城の変遷を物語ってくれる確実な資料となりうるであろう。中世陶磁器の器種としては大平鉢、摺鉢、大盤、皿、丸皿、甕等々の日常雑器と、中国青磁・白磁等々の伯来高級品が出土陶磁器総数の約5％の割合で出土している。日常雑器と高級品が一緒の場所で出土している事例からして、中世を通じて、一般庶民の集落ではなくて、土豪の集落の存在した可能性が強いように考えられる。この仮題を結論づけるには、兵農分離がどの程度まで行きとどいたかという大きな問題が残るのである。

近世陶磁器類は出土陶磁器総数の九十五％を占めている。従って中世よりも、近世の方が集落の活動が激しかった事を如実に証明している。用途を大別してみると、日常生活雑器と、祭祀用器とがある。前者の器種としては、こね鉢、摺鉢、碗、茶碗、行平、鍋、鉢皿、後者の器種としては仏しょう器、三足香炉、燈明受皿、香炉、ヒョウ燭がある。祭祀用器類の多いのは近くにあった宗明寺との関係であろう。『伊那市寺院誌』より宗明寺の由来について記すと次のようになる。本尊は十一面観世音菩薩坐像（仏身高二四、〇cm、台

座高一九、〇cm(蓮華座)、光背　金泥舟形)。開基は明暦二年(一六五六)法印宗覚代。開基当時は狸台金山宗明寺屋敷に在ったが元禄七年(一六九四)三月八日、現在地に移転した。

宗明寺の由来については確実に記録された史料はほとんど残存していない状況である。今回の発掘調査による出土陶磁器編年によって、宗明寺の開基年代が伝承されてきた時期とほぼ一致をみたわけである。

陶磁器鑑定は愛知県陶磁資料館学芸課長柴垣勇夫氏、同館学芸員井上喜久男氏、仲野泰裕氏に依頼した。ここに三氏に対し、厚く、御礼申し上げます。

最後に、梅雨時から土用中の酷暑にかけて、地熱の上昇する地面に立ち向って、スコップを一掘り、一掘り、動かし、地中の埋れた庶民の生活実態を明らかにせんがために、発掘調査に直接従事して下さった作業員の皆様、及び調査に献身的に協力下さった各位に対し、厚い感謝を心から致す次第であります。

〔付記〕

中世遺跡・中世城館跡・近世遺跡の新しき動向及び研究方法について述べてみることにする。伊那市地域でも、大規模開発によって中世の一般遺跡・墓址・城館跡等々の発掘調査事例が増加の傾向を示している。中世遺跡・中世城館跡・近世遺跡よりしばしば出土する陶磁器類の産地、編年学的研究は進歩し、現段階では熱残留磁気測定法に基づいて、四半世紀の編年組みが確立されつつある。今後は、これに留まらずに、さらに、編年の細分化がこころみられることは相違ないと思われる。

近年、中・近世遺跡を題材にした展示会や展覧会が各所で開催されるようになってきている。

(飯塚政美)

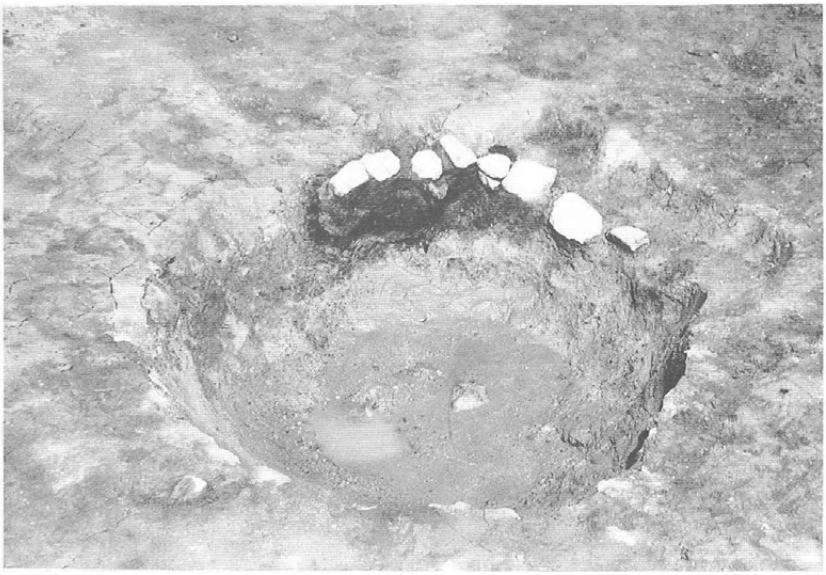
図版１　遺跡地を北側より眺む

図版２　遺跡地を東側より眺む

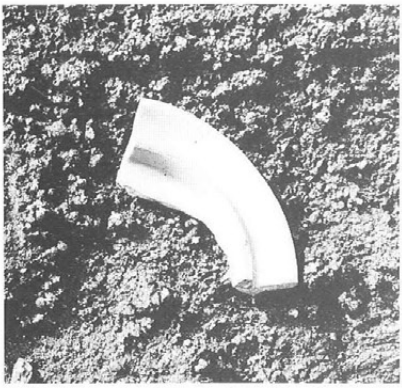
図版３　発掘調査終了後のグリット

図版４　発掘調査終了後のグリット

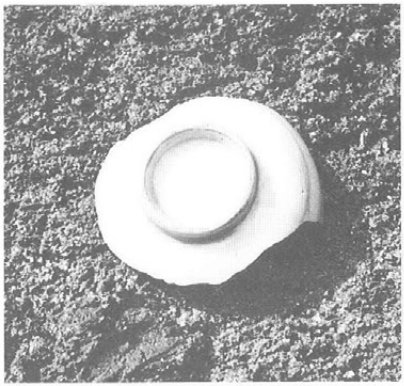
図版 5　発掘風景



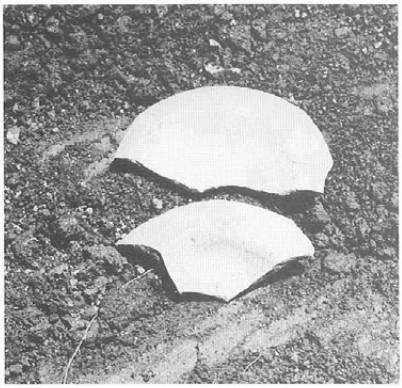
図版 6　水溜め遺構



図版 7　陶器出土状況



図版 8　陶器出土状況



図版 9　陶器出土状況

図版10　陶器出土状況

図版11　磁器出土状況

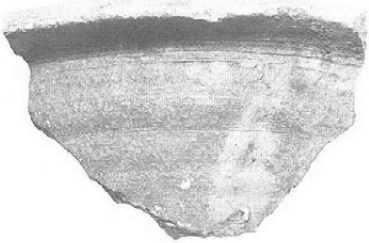
図版12　独犺石出土状況

1

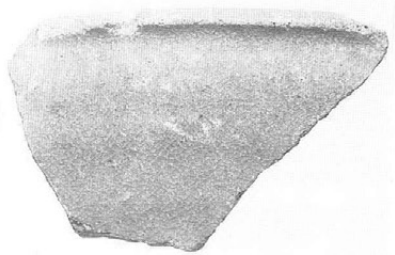
2

3

4

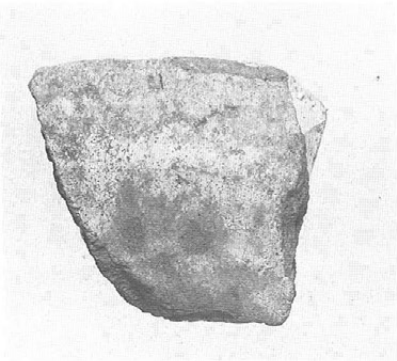


5

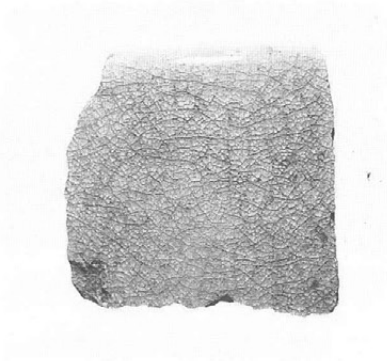


6

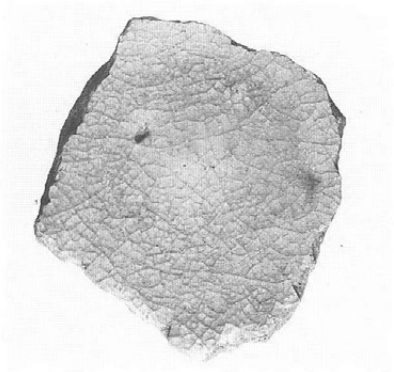
図版13　出土陶磁器



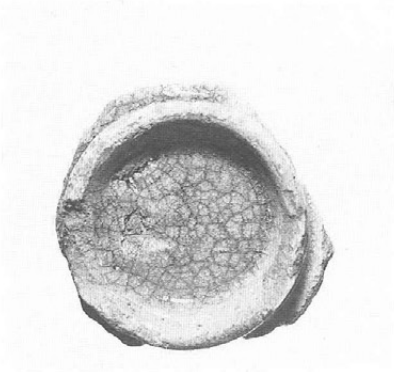
7



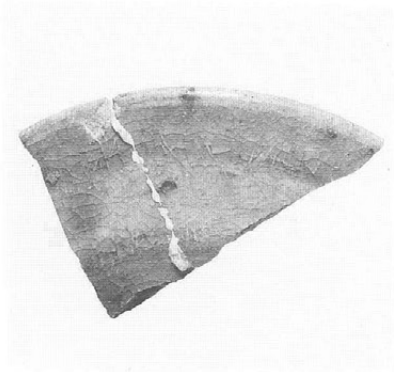
8



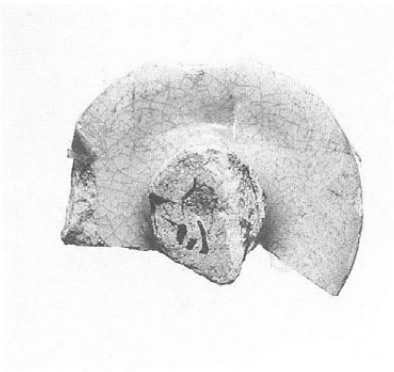
9



10



11

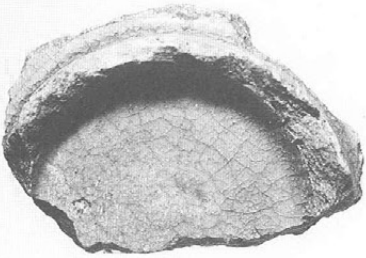


12

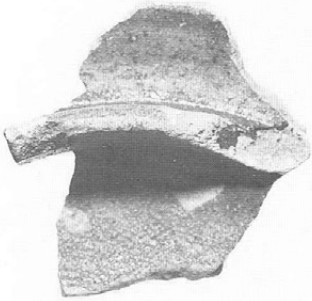
図版14　出土陶磁器

13

14



15

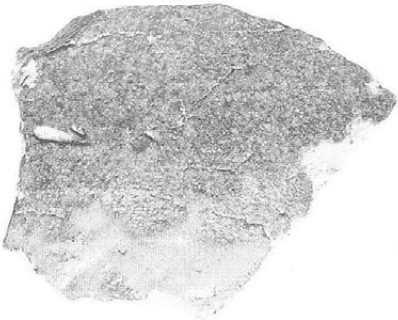


16

17

18

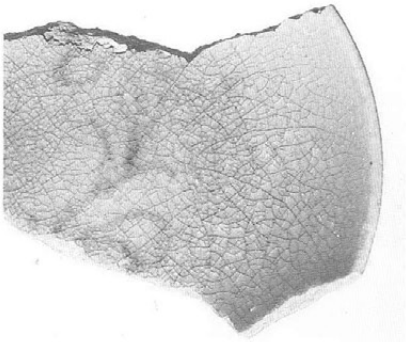
図版15　出土陶磁器



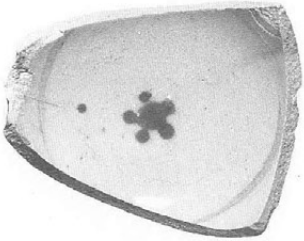
19

20

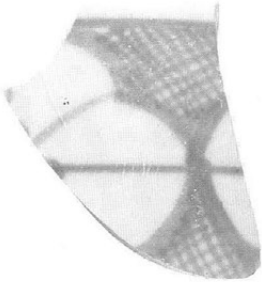
21



22

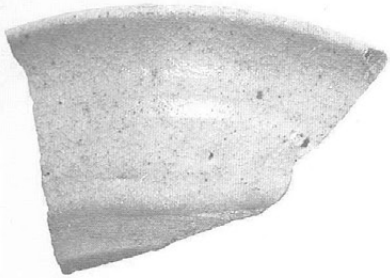


23

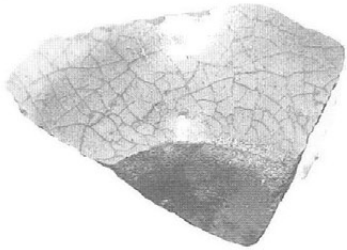


24

図版16　出土陶磁器



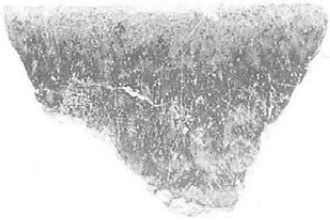
25



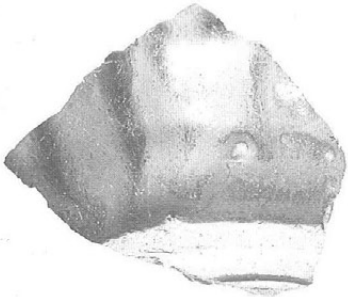
26

27

28

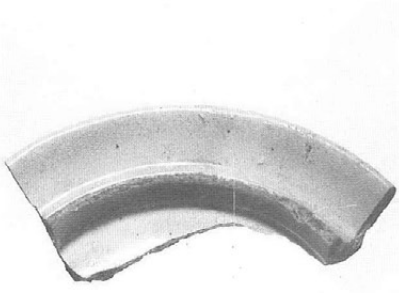


29

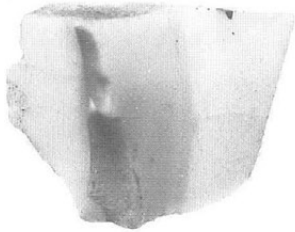


30

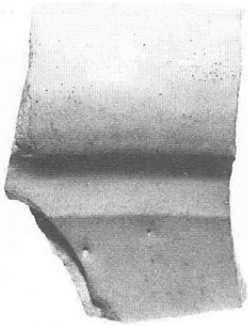
図版17　出土陶磁器



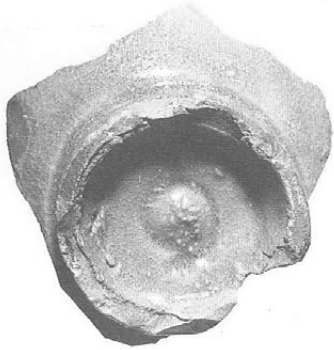
31



32

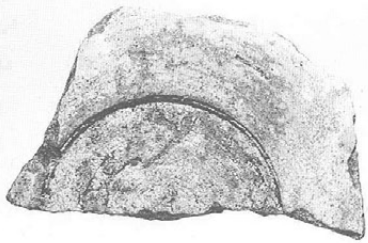


33



34

35



36

図版18　出土陶磁器

堤林・島崎遺跡緊急発掘調査報告書

昭和61年３月10日　印刷

昭和61年３月15日　発行

発行所　長野県伊那市教育委員会

印刷所　ほおずき書籍株式会社